ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

【Ｎコード】
Ｎ３４０６Ｚ

【作者名】
てんびん座

【あらすじ】
気がつくと、俺はテンプレ通りの真っ白空間にいた。そしてやっぱり神だという人物が現れて、やっぱり転生させてくれるらしい。チート能力はもらえないらしいけど、まあ、楽しむとするか。

第零話（前書き）

他の作品がまだ終わっていないのに書いてしまいました。

第零話

「……どこだ、ここは？」

そこは白かった。視界の端から端まで全てが白く、果てがない。声を出しても反響すらしないことから、とても広い空間であることがわかる。

「俺はどうしてこんな所に……？たしか、近所のコンビニに行って、それから……」

「死んじまったんだなぁ、うん」

背後から聞こえた声に彼は振り返った。そこには白衣を纏った金髪の博士風な男がいた。ふちなし眼鏡をクイッと押し上げ、気まずそうに彼を見つめている。

「死んだ？俺が？」

「あぁ、そうだ。お前は不幸にも工事現場で起こった倒壊に巻き込まれ、全身をミンチにされて死んだ。証拠に写真見るか？」

「……いえ、結構です」

確かに、彼にはうっすらとだが家の近所に工事現場があった記憶があった。おそらく、そこでの事故のことだろう。

「お前、名前は思い出せるか？いや、前世の記憶は？」

「え、ああ。俺は……」

そこで口がピタリと止まった。自分の名前が全く思い出せなかったのだ。それだけではなく、自分の家族の顔も経歴も、自分の年齢すら思い出せない。所々が虫食いのように穴だらけになっていた。

「やっぱりか。わかってるとは思うが俺は神だ。お前は生前、二次創作が好きだったらしいから意味はわかるな？」

「まさか……」

「そうだ。実はな、その事故は本当は起こらないはずだったんだよ。二次創作でテンプレの『書類にコーヒー』のパターンだ。いや、本当にうっかりしていた。マジですまん」

その時、彼はネットで見た展開を思い出していた。チート能力やイケメン、果てにはＴＳなどやりたい放題の展開になるというものだ。

「え！じゃあ俺死んだのか！？」

全くもって寝耳に水であった。別に彼は自宅警備員でも、学校で孤独な存在だったわけでもない。未練だってまだある。

「マジで悪かったな。侘びとして好きな世界に転生してくれて構わねぇ。どこの世界が良い？」

「マジか」

「マジだ」

本当に全てテンプレ通りだった。

「それなら『魔法少女リリカルなのは』の世界にしてくれ」

彼がその世界を選んだのは単純、記憶に残ってるアニメがそれくらいしかなかったからだ。炸裂する砲撃、知覚すらできない高速移動、心躍る近接戦など、頭の中に鮮烈に残っている。

「……あ～、あそこか～」

神は遠い目をして呟いた。

「まぁ、わかった。ただし、転生ってのは本来かなりの例外（イレギュラー）なんだよ。だから良く見る二次創作みたいに他作品の能力を付加するのは無理だ」

昔ならいざ知らずな、と神は付け加えた。

「だが、お前にはできるだけ好条件な状態で転生させてやる。これが俺にできる最大限だ」

「……そうなのか、わかった。色々とありがとうな」

「おう、気にすんな。元々はこっちのミスだ。第二の人生、楽しんでこい」

神がそう言った瞬間、彼の足元に穴が開き彼は声を出す間もなく落ちていったのだった。

「いや～、今回はマジで冷や汗もんだったぜ」

被害者の彼が転生していった瞬間、近くの空間が光に包まれ、そこから簡素なパイプ椅子が現れた。神はそれにどっかりと座る。

「はぁ～、もし俺ＴＵＥＥＥＥが良いとか抜かす転生者だったら面倒なことになってた。転生できるだけで満足な馬鹿で助かったな」

実際、かなりの好条件で転生できるようには取り計らった。彼の第二の人生は刺激に満ちたものになるだろう。

「いや～、それにしても、書類にコーヒーかけたら本当に人が死ぬのかって実験だったが……。はぁ、これはもうやらねぇ方が良いな」

そう言って彼はベトベトになった一枚の紙を取り出した。その紙は水気を吸ってベチャベチャになり、文字の一つすら読むことができない。彼が名前を思い出せなかったのもこれが原因だ。

しかも、

「ったくアイツら、調子に乗ってかけまくりやがって」

そう、実はかけられたのはコーヒーだけではない。

メロンソーダ、サイダー、コーラ、ケチャップ、マヨネーズ、ウスターソース、タルタルソース、牛乳、豆乳、青汁、スポーツドリンク、ココア、紅茶、ウーロン茶、麦茶、ほうじ茶、オレンジジュース、アップルジュース、ぶどうジュース、マンゴージュース、バナナジュース、カル〇ス、ヤ〇ルト、灯油、ガソリン、泥水、砂糖水、食塩水、果てには人間の生き血などを大量に。

「部下が仕事を増やしてど～すんだよ」

その部下たちには、彼を最高に持て成すために同じ世界に転生している。ただの人間一人としてあの世界を盛り上げるためだ。
なぜ神がここまでするのかというと、他の神が好機とばかりにこれを材料にして反抗してくる可能性があったからだ。この神は他の神の中でもかなり嫌われているため、充分にあり得る話だった。ならば、そのことが露見しなければ良い。あの転生者にはせいぜい幸せな人生を送ってもらって、万が一にも他の神に文句を言うことがないようにしなければ。
どうせ神なんて自分の仕事で手一杯だろうから言われない限りはバレないだろうし。

「ま、せいぜい隠蔽に付き合ってくれや、転生者くんよ」

第零話（後書き）

勢いで書いてしまったので、更新速度が遅いです。
今回は前作や前々作の主人公たちとは全く関係のない一般人が主人公なので、外道は……ありません、たぶん、きっと、おそらく。
その予定です。たまには少年漫画みたいなのを書いてみたいなと思って始めました。
もう一作の方が中心なので、更新停止はありません。どうぞご安心を。

第一話

「アスカく～ん、起きてください～」

心地の良い声が、彼を眠りの底から引き上げようとしていた。しかし、その声はまるで子守唄のように彼の脳内に木霊し、彼をさらなる眠りの世界へと誘う。

「アスカく～ん、起きないと幼稚園のバスが来てしまいますよ～？」

美声が再び声を発し、さらにユサユサと彼を揺すって起床を促そうとしてきたが、それは逆効果だった。半覚醒だった彼の脳はどんどんと機能を停止していき、

「必殺のフライングボディプレス」

絶対零度の宣言とともに完全覚醒した。

「ごっふ！」

「抉りこむように、打つべし打つべし打つべし」

さらに声の人物は彼――――アスカ＝イクシオンの胴に跨り、レバーを執拗に攻撃してくる。ボクサーかお前は。

「起きろ、さもないとコロスゾ」

「げホッ、はいっ！起きました！！」

必殺の連続攻撃に、流石のアスカも目を覚ました。寝巻きの胸倉を掴まれた彼の目に涙が溢れているのは、寝起きだからではないだろう。

そして、彼を起こした張本人はコロリと態度を元に戻し、

「おはようございます～、アスカくん」

何事もなかったかのように手を放した。

彼、アスカ＝イクシオンは転生者である。両親は出張などで家を空けることが多いため、隣の家であるここ、北条家に居候しているのだった。そしてこのボクサーもどき――――北条（ほうじょう）　瑠奈（るな）はこの家の一人息子である。しかし、その容姿はとても男であるということを信じられるものではなく、実に少女らしかった。

まず、髪が長い。腰に届くほどはある。そしてその髪は銀髪で、顔は色白、瞳は蒼穹のように透き通った青色と、全く日本人らしくなかった。彼の曾祖母が北欧系らしいので、その影響らしい。

「ほらほら～、ボサッとしてないで朝ごはんにしましょう～。今日はアスカくんが好きな和食ですよ～」

そう言って瑠奈はルンルン♪と部屋から出て行こうとし、

「二度寝したらコブラツイストな？」

そう言い残していった。目が本気だった。

「……やれやれだな」

アスカは溜め息を吐き、幼稚園の制服に着替え始めた。時刻は七時、これから朝食を食べれば充分に間に合う時間だろう。
そして彼は壁に掛かっている鏡で軽く身だしなみを整えた。母親譲りの日本人風な黒髪黒目と、西欧系の父親譲りのそこそこ整った顔立ちが映る。

「黙っていればイケメン、か？」

自分がイケメンの部類に入るのかどうかを推察しながら、アスカは一階のリビングへと降りていった。
そこには、朝のニュースを見ながら二人分の朝食を用意している瑠奈がいた。彼の両親は朝早くに出勤してしまうため、自然と朝食はアスカと二人きりになるのである。

「それでは、いただきます～」

「いただきます」

そして、アスカは瑠奈がつくった朝食にありつくのだった。

†　†　†

「アスカくんって大人びていますよね～」

幼稚園に向かうバスの中、瑠奈が突然そんなことを言い出した。

「そうか？瑠奈の方が大人びてるだろ。料理できるし」

「そんなことないですよ～」

実際のところ、二人は周囲の中では大人びていた。
アスカは転生者である。生前は何歳だったのかは既に記憶にないが、それでも彼は幼稚園児と比べれば充分に大人だ。それと同等の瑠奈の方が、アスカには不思議であった。

「黙っていれば可愛い幼馴染で通るんだけどな」

「私は黙っていなくても可愛いと評判ですよ～。もう女の子みたいな顔だとからかわれるのには慣れました～」

アスカが瑠奈と出合ったのには、それが大きく関係している。
去年の冬、彼は同じ幼稚園で虐められている瑠奈を見つけたのだ。
当初は関わる気など微塵もなく、「子供って残酷だな～」くらいにしか思っていなかった。しかし、ある日を境に虐めはパタリとなくなった。その理由を、アスカは目撃してしまったのだ。

「いやいや、その報復に年上の奴までボコボコにするような奴は可愛いとは言えないだろ」

そう、ボコボコにしたのだ。
二度と逆らう気が起きないよう、サンドバックのように年上の園児を殴り、仲間を引き連れて戻ってくれば仲間ごとサンドバックにした。それを続けた結果、瑠奈は幼稚園のガキ大将を超えた覇王となっている。しかも、先生には露見しないように細工すら行っていたのだ。

「相手を選ばないから悪いのですよ～。ほら、人は見かけによらないと言いますし～」

「お前が言うと説得力あるな」

事実、園児の中で瑠奈を軽んじている者はもういない。瑠奈が万引きしろと言えば、おそらく園児は泣く泣く万引きするだろう。それほどに瑠奈の影響力は絶大だった。

†　†　†

幼稚園の卒園は、アスカが思っていた以上に早かった。瑠奈と出会って数年、ここが『魔法少女リリカルなのは』の世界であることを忘れかけてしまうほどに。実際問題、アスカは転生の際に記憶のほとんどが塗りつぶされていたため、原作の知識は殆どが抜け落ちていた。

「あ～、なんか幼稚園時代の内にやっとかなきゃいけなかったことがあった気がする」

「急にどうしたのですか～？」

「いやさ、誰かに会わないといけなかった気がするんだよな。誰だろう？」

「……そうですか～」

その言葉をアスカが呟いたのは、二人が私立聖翔大付属小学校の入学する日だった。

いつものように殺人技（今日はジャイアントスイングだった）で目を覚ましたアスカは、別に小学校に入学するのが初めてという訳でもないため、たいして緊張はしていなかった。ただ、この学校の名前を聞いた瞬間、何か引っかかりのようなものを思い出したのだ。

「まあ、別に良いか」

「ですね～」

そして同じクラスとなった二人は教室に移動し、それぞれの席に着いた。並び方は五十音順だったため、二人の席の間には若干の開きがあった。チラリと瑠奈の方を見ると、こちらの視線に気づき、軽く手を振ってくる。

その時、担任教師と思われる女性が入室してきた。そして入学を祝う言葉を述べた後、生徒同士での自己紹介をすることになった。アスカは苗字の関係で出席番号は一番。よって、最初に自己紹介をすることになった。

「あ～、アスカ＝イクシオンです。名前が外人みたいなのは父親が外国人だからで、向こうの言葉は話せません。趣味はゲームで好きな食べ物は和食全般です。よろしくお願いします」

そして一礼。教室に拍手が響き渡った。

その後はアスカの自己紹介を参考にしたような自己紹介が続き、そして、

「はい、良くできました。それでは次の人」

「は、はい！」

その声は、どこかで聞いたことがある気がして、

「た、高町なのはです！よ、よろしくお願いします！」

その栗色のツインテールと鳶色の瞳はどこかで見たことがある気がして、

「高町、なのは？」

思わずアスカはその名前を呟いた。

その後にあった瑠奈の自己紹介は耳に入らなかった。

第二話

『それでは、次のニュースです。全国で頻発している児童誘拐事件の――』

「最近は物騒ですね～」

茶碗を片手に、瑠奈は呟いた。余った方の手は、肩にかかるほどの短さになった銀髪を弄っている。流石に男子であの髪の長さは校則違反だったため散髪したらしい。両親は大反対だったらしいが。対するアスカはそれに応えず、ジッと考え続けていた。

同じクラスの高町なのはについてである。

入学してからの彼女の印象は、とても大人しいというものである。特定の誰かと仲が良いという様子もなく、やや人見知りといった感じのする、どこのクラスにも一人はいそうな、極めて普通の少女だった。唯一目立ったことがあるとすれば、最近になってクラスの女子二人と仲良くなり始めたことくらいだろうか？

そんな彼女に、なぜ自分は目を引かれたのだろうか？

「アスカく～ん？大丈夫ですか～？」

「――ッ、ああ、悪い、何だっけ？」

「しっかりしてください～。ここのところ、誘拐事件が多いので気をつけてください～」

「応、わかった。気をつける」

「……大丈夫ですかね～？」

そう言いながら、瑠奈は食器を片付けに流し台へと歩いていった。そんなことよりも、アスカにとっては『高町なのは』の方が重要であった。

アスカが卒園した幼稚園に、あんな少女はいなかった。かといって、それ以前に会ったという記憶もない。会ったこともないのに気になる理由となると、アスカが思いつくことはそう多くなかった。

「これは、原作に関わることなのか……」

『原作』、それはアスカが転生したこの世界で起こる未来と言っても良い。この世界がどういった世界だったかは、その詳細までは覚えてはいなかったが、彼女の周囲で事件が起こることは間違いなかった。それも、アスカの僅かな記憶によれば、それはそう遠くない。

「俺は、どうするべきだ」

わざわざ転生までしたのだ、物語には当然関わりたい。神が言うには、自分はかなり恵まれた状態で転生しているらしいし、魔力だってあるのだろう。ならば、活躍できる可能性は充分にある。

「よし、とりあえずは原作に関わる高町と仲良くなっておこう。そうすれば便利だろうし」

それに彼女の容姿はなかなかに好みだ。物語でもヒロイン級だったのだろう。それならば、彼女と仲を良くしておいて悪いことなど一

つもない。運が良ければ、前世で夢見たハーレムの実現だってできるかもしれない。

当面の方針が決まったアスカは、鼻歌を歌いながら夕食を続けた。心なしか、普段の夕飯よりも数倍美味しかった気がした。実際、それはアスカの気のせいなのだが、それはそれで良かったのかもしれない。

これが北条家で食べる最後の食事だったのだから。

†　†　†

「瑠奈、これからコンビニ行くけど、何か買ってくる物あるか～？」

「いいえ、ありません～。というか、もう暗いですから明日にした方が～」

「大丈夫大丈夫」

手をヒラヒラと振りながらアスカは家を出た。まだ春先なため、夜は少し肌寒い。そんな中、アスカは切れた炭酸飲料を買うために一人コンビニへと足を向けていた。日が沈んだからか周囲には人の姿が見当たらず、住宅街はシンと静まりかえっている。

「こりゃ、絶好の誘拐日和だろ」

一人冗談を呟きながら、アスカは黙々と歩を進めた。

この辺りでは誘拐事件は起こっていない。事件は全国各地で起こっ

ているが、治安の良い海鳴だからこそ、まだ事件は起こっていなかった。そして、これからも起こるとは思っていなかったのだ。

だからこそ、アスカも油断したのかもしれなかった。

突然の衝撃。

「――――があッ！？」

どこかに凄まじい威力の打撃を叩き込まれ、アスカはコンクリートの地面に倒れ伏した。

意識が混濁し、なぜ自分が地面に倒れているのかがわからない。周囲で誰かが何かを話しているのが聞こえたが、エコーがかかっているかのようにはっきりと聞こえない。

「……お……だ…にも見ら…て……い…？」

「だい……ぶだ、けっ…いを張…ている」

コイツらは何を言っているんだ？何がどうなっている？そもそも、コイツらは誰だ？

様々なことが頭に浮かび、そして消えてゆく。そして段々と視界が暗くなっていき――――

その日、アスカが家に戻ってくることはなかった。

†　†　†

アスカが意識を失った時、彼は近くの屋根の上からその一部始終を観察していた。
コンビニへと向かうアスカに、背後から二人の男が迫って首筋に当て身を叩き込んだのだ。相当な威力だったらしく、アスカは一撃で昏倒してしまった。

「あ～あ、だから気をつけてって言ったのに～」

そう、誰にともなく呟いたその言葉に、

『どうなさりますか？保護されるのならば今しかありませんが』

彼がいつも首から提げている、白いペンダントが応えた。

「いえいえ～、これは私――――北条　瑠奈の管轄外です～」

そう言ってアスカが黒塗りの乗用車に運び込まれる様子を、瑠奈――――いや、ルナは見つめていた。彼がその気になれば、誘拐はおろか襲撃すら未然に防げたはずなのにである。

それに、とルナは付け加えた。

「これは彼の試練です～。教授が仰っていた『人生の好条件』というものは、何も家柄や才能のことだけではありません～」

『と、言いますと？』

「人生山あり谷あり、波乱万丈、つまりは『主人公』のような人生のことなのですよ～」

人間、上手くいき過ぎれば必ず飽きが来るものだ。教授はそれを回避するために、原作に関わらなくとも事件が続くように幸運のパラメーターを設定した。その結果が『これ』だ。

「教授曰く、『文字通り必死に生きてこそ、人生のありがたみがわかる』だそうです～。つまり、これは彼が死ぬ気で頑張れば何とかなる試練なのですよ～」

『そういうものなのですか』

「です～」

少なくとも、ルナはそう聞いている。アスカが人生を諦め、ここで死ぬ可能性もある。その時は、心が折れる前に改めて自分たちの内の誰かが救いの手を差し伸べれば良い。そうすれば彼は再び立ち上がり、鮮烈で充実した人生を歩んでゆけるだろう。

「さてと、それじゃあ私たちは帰りますか～。見たい番組がもうすぐ始まってしまいます～」

そう言ってルナ――――いや、瑠奈は無人の路地に降り立ち、帰路に就いたのだった。

その場に漂う、誘拐犯二人が張った人払いの結界の魔力の残滓を残して。

第三話

目が覚めると同時に、まどろむこともなくアスカは覚醒した。そのまま寝床から起き上がり、配給されている訓練服に着替える。これらの動作は手馴れた様子があり、いっそ機械的と言っても良い。それもそのはず、アスカがここに連れてこられてから既に一年の月日が経っていた。

一年前のあの晩、アスカを誘拐した二人は次元犯罪者だったのだ。彼らは管理外世界に住む魔力資質を持った子供を誘拐し、その子たちを戦闘魔導師へと育成して将来の戦力として使うという計画のテロ組織だった。子供たちの年齢や性別はバラバラで、十代の中盤のような少年もいればアスカよりも年下にしか見えない少女もいる。どうやら誘拐された子供はアスカで最後だったらしいが……。

起床して食堂へと移動したアスカは、そこで配給されたパンを黙々と食べた。周囲の子供たちも同じようにしており、そこに会話は存在しない。当然だ。彼らは稀に実戦訓練という名目の『殺し合い』をさせられる。それが数回行われてから子供たちの表情は死んだようになった。周囲の人間が、いつ敵になるのかと思うと、他人と関わる余裕など欠片もなかったのだ。

「朝食の時間は残り十分だ！早くしろォ！！」

アスカたちが誘拐され、この施設にぶち込まれてから一年間お世話になっている教官の怒号が飛んだ。それに反応して、アスカたちの食べる動作が些か忙しくなる。

———クソ不味い。

自然とそう思った。別にパンに罪があるわけではない。ただ、瑠奈がつくってくれた食事を食べて学校に行くということがどれだけ大切なことだったのかを、アスカは思い知っていた。転生者で、神が味方になっていて、あまりにも平穏が続いていたからか、生きることがどれだけ大切なことかを忘れていた。

†　†　†

訓練は基本、騎士と魔導師の二グループに分かれて行われる。グループ分けの基準は適正であり、そこに子供たちの意思は存在しない。幸か不幸か近距離適正も射撃適正もあり、魔力にも恵まれていたアスカはその中でも最強になっており、専用のデバイスも与えられていた。もちろん、それは教官たちの指示がなければ展開できず、教官たちには魔法を発動させることもできない。デバイスを管理するＡＩが自動で制御してしまうためだ。

「こんな時は不便なモンだな、インテリジェントデバイスってのも」

訓練が始まり、アスカは魔導師グループでの訓練に参加していた。両方に適正のあるアスカは、二つのグループに交互に参加させられているのだ。

直射弾の訓練、誘導弾の訓練、他にも砲撃や収束技能、空戦軌道、魔力制御など、魔導師グループにもやることは多い。これが騎士グループだと徹底的に得物（デバイス）の扱い方を教え、その後に装甲（フィールド防御）の強化訓練などがある。対人戦に特化させるためだ。

今日も一通りの訓練を消化し、最後はクールダウンをして終えるはずだった。

そう、普段だったら。

「本日はこれより、『実戦訓練』を行う！」

教官の一声により、子供たちの中に動揺の空気が伝播した。話し声すら聞こえないものの、その表情にはありありと恐怖の顔が浮かんでいる。

この『実戦訓練（ころしあい）』は、訓練場の中央に数人が呼ばれ、そこでその数人が配給されたデバイスを使って戦闘をするというものだ。子供たちへの見せしめという意味合いもあるため、その戦闘は殺傷設定で行わる。そして決闘の形式で行われるそれは、相手が死ぬまで終わらない。

――――頼む、俺を当てないでくれ……！

祈るような気持ちでアスカは願った。

通常、アスカのように専用デバイスを配給されている者が選ばれることは殆どない。専用機持ちとそれ以外では格が違いすぎるからだ。そして、専用機持ち同士がこの訓練を行うこともない。このようなことで貴重な人材を失うことも馬鹿らしいからだ。

それでも、アスカは願わずにはいられなかった。専用機持ちではなかった頃、アスカは二人の子供を殺している。ここの洗脳じみた教育のせいで殺しには微塵も躊躇うことはないが、それでも気持ちの良いものではない。まして、前世を含めて二十数年の時を生きているアスカには辛すぎた。

「これから呼ばれた者は前に出ろォ！００８番、０２７番、０６９番――――」

誘拐された子供の合計は１５２人。そして、それらの子供たちは番

号名で呼ばれていた。
もっとも、１５２という数字は一年前の話であり、現在は１４４人に減っていたが。

「０７１番、１３１番――」

そして、

「最後に１５２番！」

最後に呼ばれたのは、最後に施設にやってきたアスカの番号だった。

†　†　†

呆然としながらも、身体は勝手に指示通りに訓練場の中央に並んでいた。今回呼ばれたのは六人。つまり三組だ。そして、デバイス持ちはアスカだけだった。つまり、これは相手を一方的に殺せという意味である。

――何なんだよ、これはッ……！

待機状態のデバイスを握り締め、歯を食いしばる。既に敵の少年は配置に着き、簡易型ストレージデバイスを展開していた。自分と同年代であろうその少年の目は、専用機持ちを相手にすることの無意味さを悟った諦観に満ちていた。それでも、戦うのをやめるわけにはいかない。それが命令だから。

「チクショウッ！！」

『ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ，　ｓｅｔｕｐ』

女性型の電子音を響かせ、アスカもデバイスを展開した。
アスカの魔力光である銀色の光を放ち、フレームを展開、そして完了。その姿は槍のように先端が尖った杖で、銀色の穂先近くの柄の部分には回転式弾倉（リボルバー）が備え付けられていた。ＣＶＫ－７９２――ベルカ式カートリッジシステムである。
槍であり、同時に杖でもある。これがアスカが支給されたデバイス『ベルセルク』だった。

バリアジャケットのデザインはシンプルで、漆黒のジャケットにレザーパンツ、それに同色の篭手にブーツという黒尽くめの格好である。機能性を重視した結果であった。

展開を終えたアスカはデバイスを構え、戦闘態勢に入った。その目は、後悔と罪悪感に溢れている。

「それでは……始めッ！！」

†　†　†

号令と同時にアスカはスフィアを形成、発射した。

「クロスファイア、シュート！」

銀色の軌跡を描き、五発の誘導弾が少年に殺到する。少年は咄嗟に障壁を展開し、誘導弾を防ぎ切る。
しかし、その時点で勝負は決まっていた。

「ディバイン――――」

アスカが使うのは典型的なミッドチルダ式の魔法が多い。誘導弾で攻め、その隙を持ち前の魔力を用いた砲撃で蹂躙する。バリア強度が高かったことも、この施設で最強となった所以だ。
故に、

「――――バスター！」

牽制の誘導弾を防ぎきった時には、既に砲撃の準備は終わっていた。銀色の濁流に、為す術もなく少年は飲み込まれる。張られた障壁は一秒すらも耐え切ることはできず、一瞬で貫かれた。加えて、この訓練は殺傷設定で行われている。アスカが放った砲撃はバリアジャケットを突き破り、少年の身体を焼き尽くした。

「そこまで！」

教官の声がかかり、戦闘訓練は終了。
他の組はまだ続けていたが、終わるのを見届けることはできなかった。

「１５２番、良くやった！もう自室に戻って良いぞ」

「……ありがとうございます」

デバイスを待機状態（ブレスレット）に戻し、アスカはその場を足早に立ち去った。
他の子供たちの恐怖と憎悪の視線を背中に受けながら。もっとも、明日にはその感情も死んでいるのだろうが。

第四話

突然だが、襲撃をかける際に最も有効な時間帯を知っているだろうか？通常は夜の闇に紛れた夜襲が効果的と思われるが、それは暗殺などの場合だ。ただ単に襲撃をするだけならば、明け方が良いと言われる。

それは、何の前触れもなく始まった。

突然の揺れ、そして爆発音が施設に響き渡り、内部に警報が鳴り響いたのが始まりであった。

「な、何だ！？」

それに反応し、アスカの意識は覚醒した。しかし時間が時間であるため、本調子とは言えない。半分寝ぼけた頭で状況を確認しようと、ベルセルクを手に取った。

「おい、何が起きてる？」

『不明です。私には何も知らされて……いえ、たった今連絡が来ました。何者かの襲撃を受けたため、専用機持ちは全員迎撃に当たるようにということです。フルドライブも許可されております』

「はっ！随分と焦ってるようだな、教官どもは。それで相手は？とうとう局に嗅ぎつけられたか？」

アスカとしては万々歳だった。それならば適当に相手をして捕まれば良いだけのこと。

今頃、教官連中はデータの削除などで大忙しだろう。自分たちに構っている暇はないはずだ。

『敵の正体は不明です。……ただ、一つ問題が』

「あん？」

『敵は、一人です。それも、抵抗した者は全員が殺害されています』

「なッ！？」

ありえない。局員ならば隊を組んでくるだろう。それに、殺害という行為をそんなに易々と行うはずがない。

『マスター、早急に移動を。現在、施設の訓練スペースは全壊。その他の施設も破壊を継続しながら敵は侵攻してきます』

「……」

もう言葉も出ない。この施設には防衛システムとして多数の傀儡兵や機械兵器が配置されている。それらを蹴散らして侵攻するなど、アスカには到底できない。

「チクショウ！何が目的なんだよ！こんなトコに来たって何もねぇだろうが！」

そう言いながらもアスカは走り出した。敵がいる場所はリアルタイムでベルセルクに送られてきている。先回りは容易い。

走ること一分半、アスカは目的地へと辿り着いた。迎撃のためか照

明は落とされ、通路には僅かに覗いた朝日しか光はない。

通路の陰に隠れたアスカは、襲撃者が通過するのを待った。既にデバイスは展開している。先ほどから戦闘の音が続いているため、おそらく他の専用機持ちは正面から迎撃に当たっているのだろう。アスカにはそんな気は毛頭ない。どんなに魔力があろうと、最も確実に倒す方法を選ぶべきだと思っているからだ。

すると、不意に戦闘音が止まった。

――――やったのか！？

「おい、どうなった？他の連中が仕留めたのか？」

『状況確認中……把握。マスター、どうやらマスター以外の専用機持ちは全滅したようです。バイタルが確認できません』

全　滅　。

アスカは眩暈がした。専用機持ちは最低でもＡランク相当の実力者しかいない。そして、アスカを除けば八人もいる。それを一人で片付けたのだ。尋常な相手ではない。奇襲を選んで正解であった。

専用機たちは全てがインテリジェントデバイスで、持ち主のデータを頻繁に教官たちに報告する役目がある。そして、非常時には連携が取りやすいように互いの情報をリンクさせることが可能なのだ。そのデバイスが言うのだ。間違いなく全滅したのだろう。

その時、ガツリと瓦礫を踏みしめる音が通路に響いた。

「――――ッ！」

動揺を押さえ込み、通路の脇にしゃがみこむ。そしてそのまま腹這いになり、切っ先を襲撃者が来ると思われる向けた。

【襲撃者が通路に現れた瞬間に攻撃する。誘導弾で牽制、その後に砲撃でノックダウンだ】

最後に人を殺してから一年、合計二年間共に戦ってきた愛機はチカチカとコアを瞬かせることで答えた。
術式を構成、スフィアを展開、準備は整った。あとは襲撃者が３０メートル離れた曲がり角から出てくれば全て終わる。

そして、

通路の角から、

靴の先が僅かに見えた。

『Ｃｒｏｓｓ　Ｆｉｒｅ』

「シュート！」

刹那、銀色の魔弾が暁を駆け抜けた。その数は五発。
発射と同時に砲撃のチャージを開始する。これがアスカの必勝戦法。
通路の陰に隠れようと、壁ごと貫ける。防御魔法を張ろうと防御ごと削りきる。そのような自信がアスカにはあった。
うろ覚えの原作から引き出した、アスカの戦術である。

しかし、敵の次元はアスカの常識を打ち砕く。

「ウゼェ」

『Ｓｐｒｅａｄ　Ｂｕｌｌｅｔ』

それは、一発の弾丸だった。しかし、ただの弾丸ではなかった。

銃口から放たれたそれは一瞬で拡散し、通路を緋色に染め上げる。

さらに拡散した弾丸には若干ながらも誘導性能があるらしく、緩やかに曲がりながら通路の奥、つまりアスカのいる場所にばら撒かれた。

「なッ！？」

誘導弾は全てその奔流に飲み込まれ、砲撃は撃つ前にこちらが撃たれる。完全に出鼻を挫かれた。

『Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ』

咄嗟に身を縮ませ、シールドするのに必要な面積を最小限に減らす。

その分、シールドの密度を上げる技法だ。

そして弾幕がアスカに迫り、

轟音が響き、シールドが軋んだ。

だが、それだけだ。シールドはその役目を見事に果たし、アスカの身を守りきった。

「へぇ、防いだかよぉ」

アスカの鼓膜を、賞賛の声と拍手が震わせる。

「いやぁ、マジで死んだと思ったんだけどなぁ？おいおい、ここのクソ誘拐集団も中々良い教育してんじゃねぇかぁ」

それは少年だった。容姿からして、アスカと年代はそう変わらないだろう。

烏のような漆黒の髪。射殺さんとばかりの鋭い目つき。嘲笑を浮かべながら、黄金のように金色の瞳をこちらに向けている。

「で？テメェがラストかぁ？」

ギラギラと目を輝かせながら少年が問うた。

「……あ」

勝てない。

アスカは一瞬で悟った。気迫が、一つ一つの動作が、殺意が、違いすぎる。

ここまで勝利のビジョンが浮かばない敵は始めてだった。教官相手の模擬戦でも、状況と作戦しだいで勝てる自信はあった。

だが、この相手は教官なんかとは格が違う。

足が竦み、蹲った体勢から立ち上がることができない。デバイスを握る手さえも、気を抜けば力が抜けてしまいそうだ。

化け物。自然とその言葉が浮かんだ。アスカとそう変わらない歳に

しか見えないのに、全く違う生物を相手にしているとしか思えない。
その様子を見て、襲撃者の少年はあからさまにガッカリした表情になった。
銃型デバイスのグリップで頭を掻き、溜め息を吐く。
少年のデバイスは銃身が長く、八発まで入るタイプの大型の回転式(リボル)弾倉(バー)が備え付けられている。フレームは全て黒く塗られた無骨なデザインだ。

「チッ、さっきのはマグレかよぉ。つまらねぇ。専用デバイスがあるからにはそこそこ強ぇんだろぉが、びびってるんじゃ話になんねぇぜ」

ダルそうに肩を落とし、散歩でもするかのように少年はアスカに歩み寄った。
そしてデバイスをアスカの額に押し当て、

「死ね、ザ〜コ」

引き金に手を掛けた。
刹那、

『Ｃｒｏｓｓ　Ｆｉｒｅ』

一発の魔力弾が銃身の側面を叩き、アスカの命を救った。

『マスター！退避を！』

「――――ッ！」

瞬間、アスカは我に返り、全速力でその場から後退した。狭い通路の中を、飛行魔法と加速魔法を併用して一気に飛び退る。

「はぁ～、良いデバイス持ってんなぁ」

『Ｓｐｒｅａｄ　Ｂｕｌｌｅｔ』

感心した様子を見せながらも、追撃の手は緩めない。先ほどの弾幕が今度は連続で放たれた。

それは、数という名の暴力だった。通路は隙間なく弾幕で埋め尽くされ、少しでも加速を緩めれば一瞬で蜂の巣だろう。もはや弾丸の壁である。

――――このままだと追いつかれる……！

そう判断したアスカは、負担を無視して横に伸びる通路に身を投げ出した。次の瞬間、今しがた通っていた通路を魔力弾の壁が通過する。その数の多さに、思わず冷や汗が出た。

『マスター、無事ですか？』

「……何とかな」

慣性を無視したその軌道に全身が痛みを訴え、胃の中身が逆流しそうになる。それでも、死ぬよりかはマシだった。

「ベルセルク、俺はいつまで時間を稼げば良い？」

もはや撃退することは諦めていた。あの少年に勝つには、自分では役者不足だ。

実力も、ステージも、何もかもが最悪だ。

『はい……およそ、十分間です。それだけあれば全員が脱出できると思われます』

十分。それは長すぎた。

今の攻防、いや、蹂躙でさえたったの４２秒。その１５倍近くの時間を稼ぐなど不可能だ。

しかも、こうしている間にもあの少年は接近してきている。時間がない。

身体の痛みを無視し、アスカは立ち上がった。とにかくこの場を移動しなければ命はない。

「こうなったら、一か八かだな」

†　†　†

「うおぉ～い、逃げてんじゃねぇぞぉ」

がらんとした通路を、襲撃者の少年――――ライア＝アーロゲントは歩いていた。

途中にある部屋を一つ一つ確認し、逃げ遅れた人間がいれば容赦なく眉間に穴を開ける。

しかし、ライアが探しているのは逃げ遅れではなく、先ほど自分から逃げていった少年なのだ。

「アイツ、尻尾巻いて逃げやがったかぁ？」

興醒めも良いところであったが、それならそれで仕事が楽になるので構いはしなかった。

ライアの今日の仕事はあくまで『施設の破壊』であった。邪魔そうな奴は殺しても構わないと依頼主からの言葉もあったため、目に付いた人間は皆殺しにしている。

「でもよぉ、さっきの奴は中々見込みはあると思ったんだがなぁ」

『魔力量、戦闘センス、ならびにデバイスの性能も目を見張るものがありましたね』

その言葉に答えるのは、彼が腰のホルダーにしまっている銃『ベロボーグ』であった。

「まぁなぁ。だが、アイツは駄目だぁ。ここで奇襲でもしてくんないかと思って追ってみたが、全然だしぃ」

もう待つことも面倒になったライアは、広域攻撃魔法で地表ごと施設を吹っ飛ばしてやろうか、などと物騒なことを考え始めた。段々と本気でそれを考え始めた頃、突然視界が開け、広い空間に出た。

「ベロボーグ、ここはどこだぁ？」

『はい、第二訓練場だと思われます』

「けっ、贅沢だねぇ。二つも訓練場があんのかよ」

とりあえず、天井と壁を破壊して次に移ろうとライアがその天井を

見上げると、
莫大な量の銀色の魔力を撒き散らしながら迫るアスカの姿があった。

†　†　†

『A．C．S．，standby』

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム、展開！」

穂先に魔力刃『ストライクフレーム』を展開し、さらに二枚の魔力で編まれた翼が展開された。
アスカは現在、第二訓練場の天井付近に陣取り、ライアがやってくるのを待っていた。既に魔力は臨界点まで圧縮されており、防御は不可能なレベルに達している。

「クッソ！原作で主人公がやってたはずだけど、コントロールが難しすぎる！」

『敵の接近を確認、カウントダウンを開始します』

下手すれば、デバイスのフレームごと身体が粉々になりそうなほどの魔力の奔流を制御し、その状態を保つということは容易ではなかった。しかし、あの少年に勝つにはこれしかない。そうアスカは確信していた。

『3』

翼が脈動し、今にも飛び出さんと荒れ狂う。

『２』

ストライクフレームに魔力を限界まで注ぎ込む。

『１』

そして、乾坤一擲の覚悟を決める。

『０』

「エクセリオンバスターＡ．Ｃ．Ｓ、ドライブ！！」

『Ｉｇｎｉｔｉｏｎ』

瞬間、アスカは魔力を完全に開放した。

入り口の頭上から、音すら追い越さんばかりの勢いで突進する。

それに気づいたのか、ライアがこちらを見上げた。その顔には驚きの表情がありありと浮かんでいる。

「うぉ！？」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ』

直撃の瞬間、デバイスがオートガードを発動させ、バリアでもってアスカの必殺の一撃を止めた。

しかし、

「ベルセルク！！」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』

残りのカートリッジ６発を全て炸裂、バリアをストライクフレームが貫いた。この時点で勝敗は決した。ストライクフレームの先に砲撃のための魔力が集まり、必殺の砲撃が零距離で放たれる。

――――殺った！！

そう、そのはずだった。

「甘ぇんだよ！！」

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』

砲撃が発射される直前にバリアが爆発。二人はそれを諸に食らい、お互いに吹き飛んだ。

「死ねゴラァ！！」

『Ｒａｐｉｄ　Ｂｕｌｌｅｔ』

しかし、ライアは吹き飛びながらの不安定な体勢で反撃。数発の魔力弾を撃ち込んだ。

「ガァ！？」

その内の一発をまともに食らったアスカは右肩を貫かれ、壁に叩きつけられた。

一方、ライアは受身を取りながら地面に落下する。

「ヤロォ、マジで死ぬかと思ったぜぇ？」

至近距離で爆発を食らったにも関わらず、ライアは余裕の足取りで倒れ伏したアスカに近づいていった。

「……ぐ、クソッ！」

「はいはい、まぁお前は頑張ったと思うぜぇ？でもさぁ、世の中にはどうにもならねぇこともあるんだわ」

そして、再びライアはアスカの額に銃口を押し当てた。もう反撃する魔力も体力も残っていない。既に打つ手がなかった。

「んじゃ、まだ朝なんだがＧｏｏｄ　Ｎｉｇｈｔ♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3406z/

ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

2011年12月21日01時55分発行